

そば新品種「宮崎早生かおり」の育成と栽培特性

宮崎県総合農業試験場作物部 角 朋彦

1. 新品種「宮崎早生かおり」育成の経過

宮崎県のそばの栽培面積は約350ha（平成21年度）あり、主に「鹿屋在来」および「みやざきおおつぶ」が多く、「秋そば」として作付けされている。しかしながら、両品種とも熟期が遅いことから、県西部の標高の高い内陸盆地地域や県北部および中山間地域での栽培には適しておらず、秋まき栽培では台風等の気象災害により安定した収量が確保できない年が多かった。さらに、「みやざきおおつぶ」は極大粒で製粉歩留まりが悪く実需者の品質評価が低いことから、「鹿屋在来」および「みやざきおおつぶ」より早生で、製粉歩留まりが高く充実の良い中～大粒の新品種の育成が求められていた。

このため、以前から開花時期早晚や草丈の長短等の変異が確認されていた「鹿屋在来」の変異株

から平成13年度に個体選抜を行い、平成14年度に集団採種を行った。その後、平成15年度からは生産力検定試験を行い、平成17年度より「宮崎そば1号」の名を付して、奨励品種決定調査試験及び現地試験に供試し、平成22年度に品種登録を行い「宮崎早生かおり」と命名した。

2. 「宮崎早生かおり」の品種特性

「宮崎早生かおり」は秋まき栽培では、成熟期が「鹿屋在来」より7日、「みやざきおおつぶ」より9日早く、草丈は「鹿屋在来」および「みやざきおおつぶ」に比べて低い（表1）。主茎長は「鹿屋在来」および「みやざきおおつぶ」に比べて低く、葉は小さい（表2、図1）。収量は「鹿屋在来」および「みやざきおおつぶ」と同程度で、千粒重は「鹿屋在来」より大きく、「みやざきおおつぶ」より小さい（表3、図2）。製粉歩留りは「鹿屋在来」と同程度で、「みやざきおおつぶ」より高い（表3）。食味は「鹿屋在来」と同程度で良好で、特に香りの評価が高い（表4）。以上のように「宮崎早生かおり」の秋まき栽培においては既存の在来品種や品種と同等の収量や食味を得られた。

表1 秋まき栽培における熟性、草丈および分枝性（平成17、18年の平均値）

品種・系統名	開花期 (月/日)	成熟期 (月/日)	生育日数 (日)	草丈 (cm)	花房数	第1次 分枝数
宮崎早生かおり	10/7	11/22	62.0	73.0	16.8	2.5
鹿屋在来	10/8	11/29	68.5	78.3	21.0	2.6
みやざきおおつぶ	10/9	12/1	71.0	76.9	23.5	2.5

注) 播種日は平成17年が9月14日、平成18年が9月19日

表2 茎、葉および子実の形状（平成17、18年の平均値）

品種・系統名	茎の形状				葉の形状			子実の形状		
	主茎長 (cm)	主茎 節数	太さ (mm)	肉厚 (mm)	長さ (cm)	幅 (cm)	大きさ (cm ²)	長さ (cm)	幅 (cm ²)	長幅 比
宮崎早生かおり	70.3	7.9	4.3	0.9	5.9	5.3	30.8	6.5	4.2	1.6
鹿屋在来	75.3	8.6	4.7	0.8	5.9	6.1	35.7	6.2	3.9	1.6
みやざきおおつぶ	73.5	8.3	5.2	0.9	6.7	6.2	41.5	7.2	4.7	1.6

表3 子実の収量、粒重、品質(平成17、18年の平均値)および歩留り(平成18年)

品種・系統名	収量(kg/10a)			同左比 (%)	子実の粒重(g)		製粉歩留り (%)	検査 等級
	H17	H18	平均		千粒重	リットル重		
宮崎早生かおり	96.1	94.8	95.5	100	37.5	613	80.5	2等下
鹿屋在来	92.4	95.2	93.8	98	29.6	634	80.8	3等中
みやざきおおつぶ	99.9	91.6	95.8	100	43.8	584	78.5	3等上

注) 子実の収量、千粒重およびリットル重は水分15%換算。
製粉歩留りは整粒を用いて測定。



図1 そばの植物体(左:鹿屋在来、中央:宮崎早生かおり、右:みやざきおおつぶ)

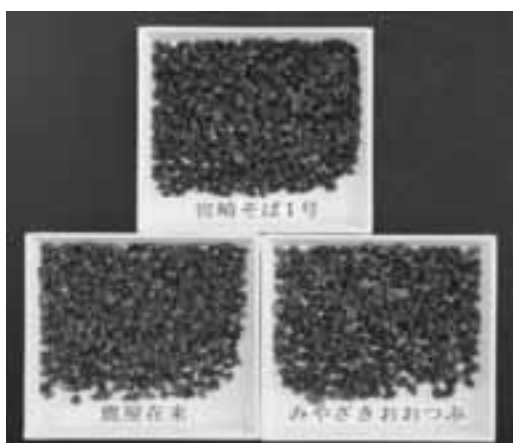


図2 子実の形状

注) 宮崎早生かおり(宮崎そば1号)

3. 「宮崎早生かおり」の春まき栽培適性の検討

一般的にそばの栽培体系は4月～5月に播種を行い、7月下旬～8月上旬に収穫する「夏そば」と、6月上旬～9月中旬に種をまいて、8月下旬～12月下旬までに収穫する「秋そば」の2つに分

けられる。そばの主産地域は北海道、東北、北陸、関東・東山に集中しており、この地域の栽培体系は「秋そば」である。また、九州においても8～9月に播種を行い10～12月に収穫を行うのが一般的であるが、新しい取り組みとして、3月～4月上旬に播種を行い5月下旬～6月上旬に収穫を行う「春まきそば」の栽培体系を確立している地域がある。この「春まきそば」は栽培期間に強い台風の影響が少ないため、「夏そば」や「秋そば」に比べ台風害を回避することが可能であるという利点を持つ。

春が早く温暖な気候に恵まれている宮崎県では、特に「春まきそば」のメリットを生かせることを考え、平成17年～22年の5年間、「宮崎早生かおり」を用いた春まき栽培試験を行った。

その結果、平成18年は播種直後からの降雨により出芽率が著しく低下したため「宮崎早生かおり」「鹿屋在来」とも低収であったものの、平成17、19、20および22年は収量100kg/10a以上と、十分な収量を確保することができたことから、春まき栽培適性は高いと考えられた(表5)。また、各年とも出芽後の生育期間に2.0～3.2℃の低温にさらされたが、生育停止や遅延となることはなかった。

4. 今後の課題と展望

そばは湿害に弱い作物であり、宮崎県は「春まきそば」および「秋そば」の出芽生育期間である3月～6月や8月～10月に降水量が多いことから、今後は水田での暗渠や畦立てによる排水対策や湿害による生育遅延を回復させる栽培法の確立が急がれる。また、そばは霜に当たらなければ、ある程度気温が低くても生育することから、「春まきそば」の播種時期の違いによる霜害の影響を

表4 食味官能試験

品種	栽培地	収穫時期	色	香り	味	食感		合計
						かたさ	そばらしさ	
宮崎早生かおり	宮崎市	平成19年11月	13.7a	14.9a	14.1a	13.9a	14.1a	70.7a
鹿屋在来	えびの市	平成19年12月	14.0a	14.0a	14.0a	14.0a	14.0a	70.0a

注) 評価は日本蕎麦協会方式に従った。パネラー14名で調査。
異なるアルファベット間にはLSD5%レベルで有意差あり。

表5 春まき栽培における「宮崎早生かおり」の生育および収量

播種年	播種期 (月/日)	出芽期 (月/日)	出芽率 (%)	最低気温 (°C)	開花期 (月/日)	成熟期 (月/日)	主茎長 (cm)	収量 (kg/10a)
H17年	3/15	3/24	-	3.1(3/25)	4/26	6/10	86.3	149.4
H18年	3/17	3/28	41	3.2(3/31)	5/1	6/7	45.7	64.3
H19年	3/14	3/24	-	2.0(4/5)	4/24	5/30	79.4	125.6
H20年	3/18	-	-	3.2(3/27)	-	6/2	84.1	125.0
H22年	3/16	3/25	-	2.1(3/27)	4/26	6/4	55.7	159.7
参)H18年鹿屋在来	3/17	3/28	43	3.2(3/31)	5/2	-	60.1	45.3

注) 最低気温とは出芽後の生育期間における最低気温および観測日である(気象庁データ)。
子実の収量は水分15%換算。
H18年「鹿屋在来」は成熟しなかった。
H17~20年は畑での栽培試験、H22年は水田での栽培試験(暗渠有り)

調査するとともに、生育初期の気温が低いことから十分な生育量を確保するための施肥量の検討も行う必要がある。さらに今後普及に移していくためには、低コスト栽培法の確立や地域による生育の違い等の課題があることから、今後とも「宮崎早生かおり」の高品質・安定多収栽培法の確立を目指して研究を進めていく。

「宮崎早生かおり」は名の通り宮崎県生まれの



早生品種で、香りが非常に高い美味しいそばである。宮崎県は、そばの奨励品種を「みやざきおおつぶ」から「宮崎早生かおり」に変更しており、平成22年度から本格的な作付けが行われている。「宮崎早生かおり」は「秋そば」はもちろん「春まきそば」でも十分な収量を確保することができるため、早期水稲地域での後作、または普通期水稲地域での前作として普及させることも可能であると考えられる。

【参考文献】

- 平成21年産そばの作付面積及び収穫量 農林水産統計
- そばにおける作期・作型の新たな動き 日作紀(2009)
- そばの栽培技術 日本蕎麦協会(1997)
- 西南暖地の春まき栽培における普通ソバ(*Fagopyrum esculentum* Moench)の収量関連形質および穂発芽の品種間差異 日作記(2009)